

タイ地方都市近郊農村における兼業化の進行 と社会変化

閔 泰子

本報告では、タイ北部、チエンマイ市近郊農村を事例に、一九七〇年代後半からの電気・道路網の充実によって準備され、一九八〇年代以降本格化した兼業化の実態を検討し、農家の兼業化が農業経営にどのような影響を及ぼし、さらに「均質的過小農社会」であった北部タイ農村をどのように変化させているのか、について検討したい。

事例村のある北部タイ、チエンマイ盆地周辺の農村は、元々の耕地不足に加え、チエンマイ、ランブーンといった中心的都市における工業化、労働市場の発展が首都バンコク周辺に比べ大幅に遅れ、一九七〇年代を通して、過剰人口が滞留し、零細經營を特徴とする過小農社会であり続けた。しかし一九七〇年代後半に準備された道路交通網の整備、電気サービスの充実を基盤に一九八〇年代以降、チエンマイ市における労働市場の拡大に伴い、事例村のような近郊農村では農民の農外就労の機会が増加し、その生活様式や農業經營に急激な変化が起り始めた。

事例村であるクアムン (Tambon Khua Mung) 村は、チエンマイ市域から約二〇キロメートルの距離にあり、サラピー郡の南西部に位置する。チエンマイ盆地を南北に縦断して流れるピン川沿いの列状稻作農村である。クアムン村は、行政から取り残された、貧しい過小農の村であった。この貧しい村が変わり始めたのは、一九七

○年代後半に行われた道路の整備、電気の導入をきっかけにして
であったが、村に本格的な変容をもたらしたのは一九八〇年代以降
の兼業化の進行であった。

た均質的過小農社会であった農村に農外所得による新たな階層分化
をもたらしてきていると言える。

(日本学術振興会特別研究員)

報告者が調査を行った一九八九年当時は、第六次経済開発計画後
半期における好景気とチエンマイ市周辺での土地投機熱、建築ブーム
に加えて、クアムン村周辺への数カ所の工場開設は農民の農外就
労機会を増加させ、ほぼ全階層的な家族成員の恒常的な賃労働者化
を進行させていた。さらに利益のほとんどない零細農業經營と家族
成員の農外就労は、農地のラムヤイ(龍眼)果樹園への転化を促進
し、農家といえどもその重要な収入源は農外就労とラムヤイ果樹園
經營となってきた。しかしラムヤイ栽培への転化は、その管理・
販売の仲買人依存という特殊な販売形態のため農家の農業經營自体
の変質を招いている。さらに農家の兼業化は、人手不足を深刻化させ
、自家消費を目的とする雨期米作においても、雇用を普遍化させ
つつある。また農外所得における格差はこれまでの過小農社会に新
たな階層分化をもたらしていくと思われる。

さらに家族成員の賃労働者化や農業の変質は、タイ農民の家族の
形態にも重大な変化を及ぼしている。第五区では子供世帯の賃労働
者化・兼業化、農地のラムヤイ果樹園化のため、親子間の農地の貸
借関係は、家族周期から逸脱した、二者関係的・一時的かつ状況的
関係となり、農地の段階的譲渡を伴う家族周期は、崩壊あるいは変
質しつつあると考えられるのである。

タイの経済発展に伴う地方都市労働市場の拡大は、近郊農村にお
ける兼業化を著しく進行させたが、この現象は零細農民の所得を安
定させる一方で、農業の変質、さらには家族周期の崩壊を招き、ま